

No.	10	
学区	滋賀学区	
主な相手先	滋賀学区文化協会、志賀八幡宮関係者、滋賀四村研究会など	
日時	2019年7月26日（金曜）	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 滋賀四村の氏神が志賀八幡宮。志賀四村の中に字があって、それぞれに氏神さんがある。滋賀里地区は倭（しどり）神社、新在家地区は大伴神社、正興寺地区は福王子神社。この周辺は氏子域が重なっており、二重氏子の状態になっている</li> <li>・ 近江神宮は後からできたので、志賀八幡宮のお祭に近江神宮の関係者が集まる</li> <li>・ 宇佐八幡宮が岩清水から召還されたときに、近隣に八幡宮が二つあることになるので、「宇佐八幡宮」と「志賀八幡宮」になったという言われがあるぐらいで、つながりはない</li> <li>・ 昔は宇佐八幡宮と区別するため、志賀八幡宮を「正八幡（しょうはちまん）」と呼んでいた</li>   <li>・ 志賀八幡宮の例大祭は9月に行われ、神輿が出る</li> <li>・ 神輿は志賀八幡宮から北（滋賀里）に向かうものと、南（南志賀）に向かうものが2つある</li> <li>・ 滋賀里のほうは八護会、南滋賀のほうはみこし会が担ぐ。元は、地元の青年団（南滋賀青年会、滋賀里青年会）があったが、昭和の終わりごろに青年会がなくなったので、新しく会を作った。正式に会に名前がついたのは、平成元年だったように思う</li> <li>・ 昔は今の自衛隊の敷地に御旅所があって、そこから禊で湖に入っていた</li> <li>・ 神輿を担ぐときの掛け声は「よい、よい」</li> <li>・ 太鼓も今は道中太鼓しかないが、叩き方が決まっている。後継者を育成するのに、指導をしている。女の子で神輿を担ぎたいという子がいるが、背丈が合わないのので、太鼓をしてもらっていることもある</li> <li>・ 昔は七度半（ななどはん）という連絡網があった。今は、携帯で済むが、使者が行ったり、来たりして準備の進捗や出発の連絡をしていた</li> <li>・ 9月15日の祭りの前に、9月8日に榊立ての神事、9月13日に当家の献撰（唐櫃で供え物を献上）と禊がある。滋賀里では今もやっており、当家が2軒ずつ回っている</li> <li>・ 榊立てのときに、全長7メートルの鉾を作る。祭り当日に南滋賀、滋賀里、蟻の内からそれぞれ1本ずつ持ち寄る。南滋賀では設計図を作っている</li> <li>・ 細工するには真竹（まだけ）である必要があるが、この地域では孟宗竹（もうそうたけ）が多く、真竹はあまり手に入らない</li>   <li>・ 正月にはどんと（左儀長）をやっている</li> <li>・ どんとでは、書初めを燃やし、火のついた半紙が高く舞い上がると字がうまくな</li> </ul>	

ると言われている

- ・ どんとで、竹筒もいっしょに燃やす。うまく焼けていると、叩き割ったときに「ボンッ」という大きな音が鳴る。燃やした竹筒は玄関先に置き、泥棒除け、厄除けになるという。竹筒を燃やすときに、それで癩酒も楽しんでる
- ・ 昔は、辻で行っていた。今はアスファルトになってしまっていてできない。町中ではできないので、どこかで引き受けなくてはいけないということで今では神社でやっている
- ・ 山ノ神の行事も行っているが、滋賀里と南志賀で若干形式が異なっている。滋賀里は農業組合が主体で、お参りは夜間、お参りに行く者以外は誰も外に出てはいけないという決まりがある。南志賀は福王子神社の氏子総代が主体で、お参りは日中、女性はお参りに行く者に会ってはいけないという決まりがある。以前、南志賀の山ノ神行事の記録映像を作って、放映したところ、地元の女性が「初めて見た」と感動したぐらい
- ・ 山ノ神のお参りの列の前に人払いをする役があるが、最近は人に会ってしまうこともある
- ・ 山ノ神の行事に使用する道具は、毎回行事の当日に作っている。南志賀公会所にレプリカが展示している
- ・ 山ノ神の行事では、蛇を作って、それを体に纏っていく。山ノ神の置く場所に着いたら、蛇の頭を恵方に向けて置く。蛇の置き方も違って、南滋賀はとぐろを巻いておく、新在家は杉の木に巻いておく、志賀八幡はまっすぐおく
- ・ 松の木で作った男根を持っていくが、滋賀里は2本、南滋賀は1本
- ・ 昔は、山ノ神の日に山の入札があった。マツタケが採れたからだが、今はない
- ・ 大通寺を中心に称念寺、念仏寺、正興寺の4箇寺があるが、特に行事等はない。4箇寺でお葬式を回したりしている
- ・ 昔の火事（山門寺門の戦い、見世赤塚の乱など）で歴史的な史料はほとんど残っていない
- ・ 正興寺は室町時代の1484年に創建されたよう。それまではお堂みたいなものだったのを整備されたのがそのとき。最終の再建は1665年のようだ
- ・ その他に、千鶴大弁財天がある。千鶴大弁財天には、良弁和尚に関する村上家の言い伝えがある
- ・ 大伴神社、福王子神社は歌の神様で有名。歌を詠む人はよく訪れている。以前マイクロバスで大勢の人が訪れていることがあった
- ・ 神社には誰もいない。連絡先が志賀八幡宮になっているのか、案内して欲しい旨の依頼の電話がある
- ・ それぞれの神社にはマイクロバスが入らない
- ・ 崇福寺跡を目指して、観光バスが入ってきたこともあった。百穴古墳群のところにバスを停めて歩いていったようだが、ヒールを履いているような人もいて驚いた

- ・地域の男衆（家の長男）の集まりとして、講が残っている。講は親戚に近い関係の人たちで20人ぐらいが集まっている
- ・南滋賀、赤塚、見世にあわせて12の講があるほか、行者講（ぎょうじゃこう）、大仏講（おぼとけこう）、地蔵講もある
- ・行者講は、滋賀里、南滋賀に一つずつあり、それぞれに祠があり、そこへお参りして、修行するという行事
- ・大仏講は、大仏をお守りする講
- ・地蔵講は、地蔵盆、地蔵を守る講。お寺さんが地蔵盆をやっているだけのところもあるが、滋賀里は講としてやっている
- ・講も昔からの形というのがあるが、皆で相談しながら、少しずつ形を変えている。負担が大きいからやめるではなく、負担を軽くして講を残すようにしている。例えば、講のあとに、代表者の家に、酒や食事を持ち寄って、酒盛りをしていたが、後片付けとかが大変なので、最近は飲食店に食事に行くようにしている。また、最近はインターネットでお札とかを注文すると発送してくれるので、足が悪い人などは、現地に赴かなくてもいいというようにしている
- ・講のなかには、各講の際にかかった費用を記録する帳面と帳面を保管する箱が残っている。帳面には、文化年間（江戸時代）のときの記録も書かれている。今は、帳面への記録はしていないが、帳面が入った箱は当番（宿）を表すものとして、回している
- ・南滋賀には互助会がある。普段の活動は少なく、葬式のときの協力が主な活動。その他、死亡連絡や会員による香典があるぐらい。
- ・南滋賀（正興寺・新在家）には、葬式のときの位牌に特殊な飾り物をしている。今では、なかなか伝える人がいなくなってきた。亡くなった家庭ではなく、近い親戚の人が飾りを作るので、そのようなつながりがなくなってきたので、少なくなってきた。今、少しずつだが後世に伝える活動をしている
- ・滋賀里では、お盆に精霊流しを行っている。以前は川に流していたが、今は川には流さず、川まで持っていくだけ
- ・初盆のときに、六波羅地蔵に参り、鐘をつきにいく。霊を迎えにいくという意味があるようだ
- ・滋賀里には田植え組みがある。昔、田植えを共同で行っていたときの名残、何かあったときに地域で助け合うもので、活動の内容は、互助会に近い。構成は近所の5、6軒で隣組に近い。田植えは女性の仕事だったので、女性の集まり。今でも、田植え勘定という名前で集まったの食事会を開いたりする。昔は、終わったときに協力し合ったので、お金をわけていたようだ。
- ・地元の産業として、お茶の栽培がある。見世がお茶栽培の日本最初の地とされており、今でもお茶の栽培をしているところが残っているが、製茶するところがなくなってきた
- ・南滋賀公会所は昭和9年に地元住民106名の出仕で作られた。もともとはそれ

- ぞれの分割財産であったが、現在は志道会という組織を作って管理している。
- ・ 現在も、地元の活動拠点として活用されているが、建物の耐震補強の対策が必要
  - ・ 滋賀学区は、里山の雰囲気が残っている
  - ・ お祭や注連縄に使う藁が手に入りにくくなっている。強度などから藁はもち米である必要があるが、うるち米と混ざらないようにする必要があるなど、作るのが大変なので、作る人が減ってきている
  - ・ もち米は非常に手間がかかる。背丈も大きくなる、刈る時期も遅い、脱穀も時期をずらさないといけない、干す必要がある、使えるのは半分だけなど大変なことが重なってしまってやる人がいなくなっている。みんなで刈り取るようなことをすれば存続できるかも
  - ・ 志賀八幡宮も宮司が稲刈りを手伝いに行っている
  - ・ 昔は1月19日の厄除け祈願祭があり、厄年の人が一束ずつ藁を持って来て、神社で注連縄を縫って、厄を落とすという行事をやっていた。しかし、今の80代ぐらいの人から注連縄の縫い方が伝えられなくなって、その式ができなくなった。今は、総代が注連縄を縫って、その一部を切ってもらおうという内容に変わった
  - ・ 藁のやり方を間違えて作れないということもあった
  - ・ 休耕田を使ってみんなでもち米を作るので、そこに行政の支援をしてもらえないか
  - ・ 昔は、藁を結うのが副業であったので、藁打ち小屋が辻々にあった
  - ・ 滋賀四村は、学区が滋賀学区と唐崎学区に分断されてしまったため、つながりが薄くなってきている。同じ学校に通っていた世代が昔の姿を記録として残していく活動をこれからしていきたいと思っている
  - ・ 昔の文化を伝えていきたいと思うが、学区が違うため、伝えるのに差が出てしまう
  - ・ 大伴神社に1000年祭のときに詠まれた歌が展示してあるが、墨で書いてあって、判読できないものもある。それを解読してもらいたい
  - ・ 境内の木を安全のために切ったら、始末書を書かされた。どうも境内の森林が保安林かなにかに指定されているようだ